

「第1七生隊の出撃・不時着から第5七生隊再出撃・散華に至る間の森丘少尉を想う」

1. 「第5七生隊員として散華した森丘少尉」

昨年は、これまでの「身近なる特攻史」シリーズの一環として、私の郷里（長崎県大村市）で唯一の航空特攻戦没者である海軍予備学生第13期・晦日進少尉を調査し、当会報（147号）に投稿した。彼は鹿屋基地に進出する前に元山航空隊（現在の北朝鮮内に配備）に所属していたため、現地での訓練ぶり等を理解する上で当会が発行している『森丘哲四郎 手記』（以下、『手記』）（注1）を活用。その手記の中で、特攻出撃までの心情等を克明に綴った森丘少尉は、晦日少尉が指揮官として率いた第5七生隊の列機の搭乗員でもあり、共に昭和20年4月29日に沖縄本島東方にて散華したことを知った。

以下は、鹿屋航空基地史料館内で掲示されている森丘少尉の経歴概要である。



- ・作戦方面：菊水4号作戦
- ・布告番号：109
- ・出撃部隊：神風特別攻撃隊第5七生隊
- ・出撃日時：20.04.29 14:17
- ・階級：少尉
- ・戦死日：20.04.29
- ・搭乗機、機数：爆戦 4
- ・生年月日：大正11.4.21
- ・年齢：23歳
- ・出身期別：予備学14期

- ・所属部隊：第721海軍航空隊附
- ・出身県：富山県
- ・戦死場所：沖縄北端東方

『手記』を読み、気にかかった事がひとつ。森丘少尉は、最初の特攻出撃（昭和20年4月6日）において「エンジン不調で奄美大島に不時着 帰還」（注2）との記述があるが、『手記』自体は4月3日を最後に、不時着から第5七生隊出撃までの間の本人による記録は一切ない。

この疑問から、前回調査の縁もあり、森丘少尉は不時着以降、いかなる経緯で鹿屋基地

に帰還し第5七生隊として再出撃するに至ったか、その間の苦悩はいかばかりであったかについて、強い関心を抱くことになった。

そうした中、海軍第14期予備学生遺族会・茂木尚氏から、前回私が投稿した記事への所感と関係資料を提供いただいたこともきっかけの一つとなり、本テーマに取り組むこととした。

ここでは、森丘少尉が第1七生隊として出撃後から、第5七生隊での散華までの間（昭和20年4月6日～4月29日）を対象に、関係する文献・資料及びご親族等への聞き取りを基に調査した結果をとりまとめるとともに、個人的な所見を述べる。

2. 「第1七生隊員として鹿屋基地出撃から奄美大島の不時着まで」（昭和20年4月6日）

この項では、まず昭和20年4月6日の沖縄方面における航空作戦の全般、並びに第1七生隊が鹿屋基地から出撃した際の状況を、それぞれ関係する文献を基に確かめた。次に、米軍艦船への攻撃に向かう森丘少尉が搭乗する機体の不具合により、奄美大島に不時着した事に関連する記述を、文献及びデジタル・データから検索。

ここまでの成果を踏まえて、森丘少尉が不時着を敢行するにあたり、如何なる心境と判断があったのかを推察するとともに、その間の機体操作についても航空自衛隊の現役戦闘機操縦者に机上での模擬を試みてもらい、その結果を付した。

（1）4月6日における沖縄方面の作戦概況

七生隊と命名された各飛行部隊による航空特攻は、「菊水作戦」の一環で実施されている。この菊水作戦については、『戦史叢書第017巻「沖縄方面海軍作戦」及び『大東亜戦争戦史叢書第17冊付録』の内容を抜粋、要約して当会の会報第147号18頁に記載したほか、『特別攻撃隊全史』（62～75頁）にも記述されている。

第1七生隊に関わる出撃については、『第721空爆戦隊戦闘詳報第3号』（昭和20年4月6日菊水1号作戦）（注3）にその詳細が記されている。このうち、「第2経過」の「1. 経過概要」（注4）には、「1339～1610ノ間ニ46機発進 通信状況ニ依レバ 概ネ1655ヨリ1830ノ間ニ敵部隊発見 1615ヨリ1746ノ間ニ沖縄周辺敵艦船群ニ対シ突入ニ成功セルモノ如シ（1600発動機不調ノ為1機帰投）」とある。また「2. 自隊ノ戦闘経過」（注5）では、表をもって編隊毎の経過が示されている。

（2）第1七生隊・森丘少尉の出撃状況

前項における第1七生隊の行動経過の中で、森丘少尉の出撃状況に特化して細部を調べるにあたっては、『第721空爆戦隊戦闘詳報第3号』と『海軍 第14期遺族会資料』を照合した。その結果を次に列挙する。

ア 文献記録等から森丘少尉について明らかになった点

- (ア) 4月6日に11区隊の所属として鹿屋基地を1540に発進。第1七生隊は4つの区隊から構成。通常、1個区隊は4機編制。(注6)
- (イ) 搭乗機は、25番(250kg)爆装、機銃弾100発装備、燃料満載(注7)
- (ウ) 第1七生隊の未帰還者名簿には森丘少尉の記名はない。(注8)
- (エ) 前項の附属編制表中にある森丘少尉に関する記事欄には、「帰投」の記載(注9)があり、当該戦闘詳報の作成日である4月16日までに森丘少尉の存命が確認されている可能性がある。

イ その他関連事項

- (ア) 11区隊の2番機が1600に帰投している(注10)が、岡部平一少尉か鈴木弘少尉のどちらかであるはずだが、関係の文献には、岡部機との記述(注11)がある。なお、岡部及び鈴木両少尉は発動機不調で帰投し、4月12日第2七生隊の第3区隊として共に出撃、戦死している。
- (イ) 第1七生隊で最後の出撃となった13区隊の4機のうち、片岡良吉少尉は機体トラブルのため発進中止となったが、代わりに大村空の谷尾計雄上飛曹が出撃、未帰還者(注12)となっている。

(3) 奄美大島における森丘機による不時着の経緯

『手記』の中で森丘少尉の姪にあたる名和まどか氏が「奄美大島伊須湾の阿木名海岸砂浜に機体を大破させること無く不時着。」(注13)と述べている。本年4月旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式の前日に、直接ご本人にお会いした。不時着場所をお聞きした際に、機体自体は海軍基地の隊員と思われる集団がトラックに載せて回収したとの話もうかがった。

森丘少尉の不時着については、幾つかの文献等に関連する記事を見ることができる。中でも『奄美郷土研究会報』には、「(阿木名) ...日本の特攻機2機、浜と山に不時着。...」(注14)との記述からは、不時着場所として阿木名海岸の浜辺が特定できるが、日付が不明。

一方、奄美大島の埋蔵文化財センターに問い合わせたところ、『大島防備隊戦時日誌』(注15)の中に該当すると思われる情報があるとの紹介を得ることができた。次がその内容である。「6日宝島見張所1545発 大島防司令宛 味方戦闘機本島東岸二不時着ス 無電」(注16)。この海軍の記録からは日付が6日であり、森丘少尉の機体である可能性が極めて高いが、先述の鹿屋基地発進時刻との不整合から確定するまでには至らなかった。



また不時着後の状況に関しては、「島のため格好の平地も見当たらなかったため、多少のけがをしたが、生命に別条はなかった。... けがも駆け付けた住民や駐屯の部隊の手厚い看護で、大したこともなくすんだ。しばらくの休憩をして平静にもどった彼は、もう一度再起を期して鹿屋基地へもどることになった」（注17）の記述からは、森丘少尉は軽傷で歩行可能であったと推察できる。当時、阿木名には陸軍暁部隊、第2740部隊、海軍防備隊、海軍航空隊基地阿木名派遣隊が配備（注18）されており、また不時着した阿木名海岸から南西約3.5キロに海軍航空隊古仁屋基地があったことから、こうした部隊等が

救助・機体回収を行ったのではないだろうか。

【阿木名と古仁屋の位置関係を示す地図】

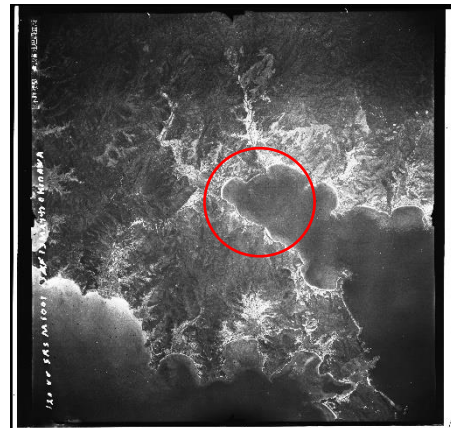
（4）不時着に際しての森丘少尉の判断と手順等に関する推察

これまで文献等より得た諸情報と、森丘少尉が搭乗した零戦21型の性能諸元から次の仮定を立ててみた。

ア 状況：奄美大島海峡上空においてエンジン不調等の不具合発生（特攻機の中継基地及び不時着場として使用されていた徳之島及び喜界島への飛行が困難な程の状況）

イ 時期：4月6日1500～1800の間（鹿屋基地の発進時間と奄美大島までの距離から換算）

ウ 装備：250kg爆弾、なお燃料は離陸時満載であり、残燃料は充分



エ 不時着場所：緩く湾曲する長さ数百メートルの砂浜

【現在の大島郡瀬戸内町・阿木海岸】 【昭和22年米軍による空中写真】

オ その他：不時着後の操縦者は軽傷の様相

これらの仮定のもと、緊急着陸を余儀なくされるほどのわずかな時間の中で森丘少尉が如何なる判断の下に、どのような緊急着陸の手順をとろうとしたのかについて、よりイメージを鮮明にするため、航空自衛隊所属の現役戦闘機操縦者に模擬、検証を試みてもらった。検証にあたっては、当方から、現在の阿木名海岸の写真数枚、阿木名海岸上空を撮影した YouTube 動画、零戦 2 1 型の基本的な性能諸元を併せて提供した。

■ 零戦 2 1 型の性能諸元（ネット情報から引用）

- ・全幅 12.0m
- ・全長 9.05m
- ・全高 3.53m
- ・自重 1,754kg
- ・最大速度 533km/h（高度 4,700m）
- ・上昇力 6,000m まで 7 分 27 秒
- ・上昇限度 10,300m
- ・エンジン出力 940 馬力（栄 12 型エンジン）
- ・航続距離 3,350km（増槽装備時）
- ・乗員 1 名
- ・武装 20mm 機関砲用、7.7mm 機銃
- ・爆装 250kg 爆弾 1 発



検証の結果は、次のとおりである。ただし、あくまでも文献等からの限られたデータを基に、現代の戦闘機操縦者による航空知識と飛行技術の観点からの見解を時系列で列挙したものである。

なお、今回個人的に協力を得た現役の航空自衛隊戦闘機操縦者は、自らを森丘少尉の身に置き換え、思考・行動を 1 人称で表現することで臨場感を出すことに注力している。その全文については文末に掲載。

- ①：離陸後 1 時間ほど経過した頃、発動機が不調。燃料系統の不具合だろうか。シリンダー温度が低めを指す。カウルフラップを調整し、燃料コック及び自動混合気調整装置のレバー、それぞれの位置を確認。速度が保てず、高度を維持できない。
- ②：編隊が乱れる。この機体では任務が遂行できない。不時着を決意。指揮官機に手信号で編隊離脱を告げる。
- ②：眼下は奄美大島か。海上の不時着は危険だ。数百米長の砂浜があれば望まし

い。奄美大島南部の入江上空を高度千米で通過中、右手に見える湾の奥に広がる砂浜を認めた。左降下旋回で四分の三回転すれば進入できるはずだ。

- ④：砂地に主脚がとられれば機体は転覆する。フラップは通常どおり使用し、操縦席に閉じ込められないよう風防は開けたままにしておこう。
- ⑤：しまった。二十五番（250 kg）爆弾を抱えていた。左降下旋回から右バンクを切り返し、下方に船がないことを確認。針路東でいったん旋回を止め、無理を承知でスロットルレバーを開き上昇姿勢をとる。その刹那、爆弾を投下器から分離し、すかさず左急旋回で離脱。
- ⑥：西日に向かって着陸態勢に入る。砂浜に岩場は隠れていないか、人はいないか。横転しないだろうか。やれることだけのことはやった。あとは運に身を任せよう。
- ⑦：機体の接地を感じるや否や、思いのほか強い衝撃を感じ、照準器に額を打ち付けた。額からの出血を除けば、けがはない。プロペラは無残に折れ曲がっているが、火の手が上がっていない。初めてにしては、上出来の不時着だろう。

3. 「奄美大島から佐世保を経由して鹿屋基地へ帰還、再出撃」（4月6日～29日）

（1）不時着以降の奄美大島に滞在

不時着した以降の行動については、『手記』の中で、名和氏は「...歩いて山越えし、古仁屋海軍基地へたどり着き」（注19）と続けて述べている。当時、古仁屋には陸軍の奄美大島要塞司令部をはじめ戦闘及び兵站・後方の各種部隊が配置されており、海軍では古仁屋の須手に大島防備隊指揮下の佐世保海軍航空隊古仁屋派遣隊が展開（注20）していた。おそらく森丘少尉はすでに壊滅的な被害を受けていた古仁屋水上



基地関連施設（防空壕、バラック）に身を寄せていたのではないだろうか。当時の古仁屋地区及び須手の航空基地の被災状況について次の記述がある。「瀬戸内は（昭和20年）3月10日に敵の大空襲を受けたのである。部落民の狼狽振りは言語に絶する思いがあった。それこそ初めて敵の大編隊に依る空襲を身近に体験したのであるから。目標は須手の

飛行場と停泊中の船舶であったようだ。唯一回空襲で飛行場は殆ど全滅、停泊中の船舶は悉く撃沈されたのである。それから須手の飛行場に飛行機の影を見ること無かった」（注21）。

【現在の古仁屋水上基地跡】

さらに「古仁屋に着いてみると、航空隊は空襲で全焼し、隊の司令部は防空壕の中に、引っ越していた。そして、不時着した飛行機の搭乗員や、負傷した将兵が沢山いた」

(注22)と、先に水上偵察機で徳之島に不時着し、古仁屋に移動してきていた神園望氏による記載もあり、この「不時着した飛行機の搭乗員」のうちの一人が森丘少尉であったとも考えられる。

(2) 帰還のための佐世保へ移動

森丘少尉は不時着後、1週間ほど、奄美大島（古仁屋地区・須手）に滞在したことになるが、不時着時の怪我の治療・快復のほか、連日の空襲により移動手段の確保が困難であったと思われる。また佐世保への移動手段については、今回調査した関係の文献から、「本土とのあいだの便船を乗りつぎ、12日に佐世保港に上陸」、「たまたま避泊していた潜水艦に便乗して佐世保に帰投」と諸説があることがわかった。

こうした中、奄美諸島の戦史に造詣が深い菊池保夫氏から関連情報の提供を受けた上で、現地での文献調査を行った結果、森丘少尉は4月12日深夜に海軍水上機に同乗して古仁屋から同機の任務先である佐世保に帰投したと考える。その理由としては、まず先述の神園氏が戦後寄稿した戦争体験記の中の次なる文があげられる。「毎日、空襲の激しい古仁屋に、約1週間いた。そのうち、水上機が佐世保に飛び立つ、というので、便乗させてもらう事にした。私は、先に特攻出撃途中不時着した、森丘哲四郎少尉（予備学生出身）と同乗し、二人の部下は他の水上機に便乗した。午前三時頃空襲の激しい合間をみて、水上機は古仁屋を離水した。しばらくして、鹿児島島の南端、坊の岬にさしかかった。すでに、ここにも敵哨戒機が飛びまわっていた。「本土決戦間近し。」の感が、ひしひしとして、皆只無言だった。敵哨戒機から逃れようと水上機は、海面すれすれに超低空を飛行、敵機の目をかすめながら、やっとの思いで、佐世保航空隊に着水した。」

(注23)

次に、当時、古仁屋には951空派遣隊が展開しており、同隊の隊長であった荒川中尉が「奄美大島の絶好の艦隊泊地を狙って敵が上陸するのは時間の問題であるとして、敵潜のため船を使わず、もっぱら零式水偵で毎夜の如く佐世保から機銃、弾薬、手榴弾、擲弾筒等を補給していた。その水偵の帰り便を利用して、不時着搭乗員等を佐世保に送還していた...」(注24)と回想している。さらには、昭和館に所蔵されている『とんぼ』(注25)からも、佐世保から古仁屋へ定期的に零式水偵で空中輸送を実施していたことがわかる。



なお、当時、機種が異なる水上機が運用されていた中で、神園大尉及び森丘少尉が搭乗した水上機がほぼ零式水偵と断定できる

もう一つの理由としては、同機が3人乗りであることがあげられる。

【零式水上偵察機（ネット上から引用）】

（3）佐世保から鹿屋基地へ帰還、再出撃

先述の神園氏の戦争体験記によると、森丘少尉が神園大尉と共に佐世保に到着したのは12日の早朝頃と考えられる。それ以降の鹿屋基地までの移動にかかる記述として、「15日出水基地に帰投し、待機中だった。その途次、行きつけの阿久根温泉、栄屋旅館に立ち寄った」（注26）、「出水基地へ着いたのは、15日のことだった。途中、出水空時代に行きつけのクラブに使用していた阿久根温泉の栄屋旅館に一泊した。…翌日、出水空へ向かったのである。」（注27）、「今でも森丘さんのことは忘れられず、ついこの間のこのように覚えているのでございます。最後にお見えになったのは4月14、5日と思います。（中略）その日の夕方、突然駅から電話がございまして、森丘さんが泊りに来られるという知らせがありました。お着きになったのは9時頃と思います。（中略）午頃（*ママ記載）阿久根駅をご出発されたのでございますが、駅までお供をし、発車した汽車の後を追って走り、及ばなくなるや力の限り手を振ってお見送りしたのでございます。」（注28）がある。これらの記述から、森丘少尉は4月14日に阿久根の栄屋旅館に一泊し、翌15日の昼頃に阿久根駅から出水基地に向かい、同基地にて17日まで滞在して同日、鹿屋基地に帰還したものと推察。

他方、12日及び13日の両日については、関係の文献・記録を見出すことができなかった。神園氏は戦争体験記の中で、佐世保を出発後、鹿屋基地に到着するまでの間の事を次のように記述している。「佐世保から鹿屋への、飛行機便はなかった。やむなく、汽車で鹿児島に向かった。当時は、国内も至る所空襲が厳しくなり、汽車もなかなか時間通り運行出来ず、出水に午後十時頃着いた。出水で駅員に頼み込んで、貨物列車に便乗させて貰い、夜十二時頃、草道駅（川内）に着き、駅近くの自宅に立ち寄った」（注29）。こうした状況からすると、森丘少尉も神園大尉と同様、鉄道移動に頼らざるを得なかったものと思われる。

鹿屋基地に森丘少尉が帰還した以降、第5七生隊として再び出撃するまでの森丘少尉に関する行動等を関しては、唯一、先述の神園氏の戦争体験談では、「古仁屋から一緒に帰った、森丘少尉は、4月28日（*ママ記載）、「今度こそ立派に突入します。」と云って、にっこり嬉しそうに笑い乍ら、見送る私達に手を振り、特攻機に乗って飛び立った。」（注30）とある。

森丘少尉が第5七生隊として散華された際の状況等は、冒頭において鹿屋基地史料館のプロフィールに示したとおりであるほか、会報147号の18頁に記述した「4. 沖縄方面において散華された4月29日の戦況等」の中で詳しく記述したつもりである。その中で爆戦6機のうち、第2区隊（3機編隊）の1機が森丘少尉である。ちなみに、他の2機は指揮官・晦日進（予備学生13期）、僚機・北村徳太郎（14

期)である。

4. 「調査研究の総括と共に特攻80年の節目に想うこと」

今年度の調査研究については、昨年度の調査を実施した私の郷里で唯一の航空特攻戦没者である晦日進少尉の僚機であった森丘哲四郎少尉を対象とさせていただいた。森丘少尉は本文において紹介した手記を後世に残していることで広く知られているが、私はあえて彼の手記が全くない「第1七生隊として昭和20年4月6日出撃から、奄美大島に不時着、佐世保・出水を經由して鹿屋基地に帰還後、4月29日第5七生隊として再び出撃・散華するまでの3週間強」の期間に焦点を当てて調査活動を実施した。

昨年未から開始した参考文献の検索等にあたっては、森丘少尉のご親族である名和まどか様、海軍第14期遺族会・茂木尚様、奄美諸島の沖縄戦を中心とする戦史研究家・菊池保夫様、鹿屋航空基地史料館・奄美市立奄美博物館・奄美市立図書館・瀬戸内町埋蔵文化センター・瀬戸内町立図書館郷土館の関係職員・学芸員の方々から多くの貴重な情報を提供していただき、あらためて深謝申し上げます。

今回の調査活動において新たな事実にとり着くことはなかったが、森丘少尉の手記なき3週間に関連する文章が載る文献等を、あらためて検索・拝読しながら調査結果をとりまとめることができたと自負している。結びにあたり調査活動を通じて、特に強く印象に残った事に若干の所感を付させていただきます。

(1) 不時着時の心理と操縦を読み解くことによる顕彰

第1七生隊として出撃後、奄美大島上空でエンジン不調に陥り、阿木名海岸に不時着するまでの間について、既存のデータを基に航空自衛隊所属の戦闘機操縦者によって森丘少尉の心理描写（本稿の「追記」に、全文を掲載）を行ってもらえたことは得難い成果であった。これにより、ご親族はもとより旧軍関係者をはじめ多くの方に上空における搭乗員の切迫した心理状態、戦闘機の緊急操作等に関する臨場感、さらには森丘少尉の息遣いさえ感じていただける良き顕彰になるのではないだろうか。大正11年生れの森丘少尉は存命なら来年4月で満103歳を迎えられるが、ご本人もきっとこの試みを喜んで受け入れていただけるはずである。今後、当時の気象及び地形の状況を気象庁・国土地理院の詳細なデータを取り合わせることで、ドローン器材やコンピュータ・グラフィックを駆使した映像化も期待できるだろう。

(2) 「手記」なき時期の心情を推し量ることによる慰霊

森丘少尉の手記は、昭和17年4月23日（東京農業大学実習時代）から昭和20年4月3日（元山航空隊）までの、まさに青春時代の日々を様々な視点で書き綴られている。それら全ての内容が実物の写しと活字の両形式で掲載されているのが、当会が平成27年12月に発行した『森丘哲四郎 手記』である（実物のノートは、

鹿屋基地史料館に遺族により寄贈)。

元山航空隊において天候不良により第1七生隊の出撃を待つ身のもどかしさを記した4月3日付の手記以降、彼は紙による記録を残していない。先述のとおり、あれほど長きにわたり日誌・日記として書き続けたにもかかわらずである。この点について、姪である名和まどか氏に問うてみたところ、「哲四郎叔父は、「逝く」と覚悟した時点で無心の境地に身を置いたことで書き物を一切残さなかったのでしょう」と応えられた。

それだけに森丘少尉の実妹の名和まさ糸氏は「...兄は、不運にも奄美大島に不時着、天皇誕生日の4月29日午後11時18分に再度出撃玉砕致しました。再度出撃迄の20日間余りの兄の心情を思う時、どんなに苦しく辛く長い日々だったことと未だに切なく思いやられます...」(注3 1)と戦後語っておられ、同氏の娘にあたる名和まどか氏も「不時着時後の伯父の気持ちを思うと日記に残した文面以上に心が揺れ動いたのではと涙が溢れます...」(注3 2)と述べている。また鹿屋基地への帰還途中に泊した栄屋旅館の岩崎治子氏にあっては、「お話をしてもどことなくお淋しそうでございました。そのうち、再びお部屋をお伺いしましたら、お部屋の隅でじいっと何か考え込んでおられまして、それはいかにもさびしそうでございました。私はなんとお話しすればよいかと思ひあぐみ、気詰まる思いでそのお姿を見ていたのでございます。」(注3 3)と語ったとされている。

こうした悲哀の情が伝わる一方で、本文で紹介したとおり先に奄美大島の古仁屋から零式水偵に森丘少尉と一緒に同乗して鹿屋基地に到着していた神園大尉は、第5七生隊として出撃する森丘少尉が、「...にっこり嬉しいそうに笑い乍ら、見送る私達に手を振り、特攻機に乗って飛び立った...」(注3 4)と書き残している。この時の森丘少尉の心の内をどのように理解すればいいのであろうか。玉砕をもって逝くとの決心したことで人生を達観、無我の境地に至ってなお両親、兄弟、友人、周囲の関係者に「笑み」を浮かべ応え得るものなのだろうか。森丘少尉だけではなく、特攻隊員だけでもない、国難・国家存亡に際しての死生観を真に理解することは、今現在、身命を賭す難儀に直面するものでない私にとって困難を極めるが、何度も「手記」を読み返すことによって次第に理解を深めていけるのではないかとも思う。

(3) 史実を追究する中でも、個人の確信は不変の事実

これまで特定の特攻の隊員並びに同所属部隊等に関する個々の事象を調査研究するにあたっては、戦争・戦闘の実態・実情を多くの方々に知っていただくために、旧軍の「戦闘詳報」「戦時日誌」「機密電報綴」等に記載されている情報・データの検索を優先してきた。今回の調査において活用した『海軍特別攻撃隊戦闘記録—航空隊編—』には次の記述がある。「戦闘詳報は作戦指揮の重要資料として作成されるものであり、その正確さは何よりも重視されていた。したがって、基本的には文字どおり一次資料として扱うことができる。しかし、原則的にあくまでも日本側だけみた記録であるということを考慮する必要が

ある。つまり、味方の作戦計画、兵力、味方の損害や戦闘経過などは事実に最も近いと考えられることができる。しかし、相手に与えた損害や、相手側の行動などについては、日本側の戦闘詳報からは事実を引き出すことは難しいのである。これらは当然ながら米国の戦闘詳報あるいは公刊戦史と照合することによって、初めて事実が再現され、戦闘詳報自体の真の価値が引き出されることを忘れてはならないだろう。」（注35）と。今回の森丘少尉の行動経過は米軍との交戦を伴うものではなく、日本軍内で完結していることから、史実の一次資料として大いに有効であることになる。ただし、戦闘詳報の裏付けが明確であるのは森丘少尉が鹿屋基地から4月6日に第1七生隊の一員として出撃した際の状況と後日同基地に帰投したことだけである。奄美大島不時着以降、同島から零式水偵に同乗して佐世保、出水を經由して鹿屋基地に帰還したことは証言によるものとなる。

したがって、森丘少尉の奄美大島からの帰還については、戦後生存された特攻隊員を含む森丘少尉の関係者の方々による記録を照合、参照する等して、可能性の比較的高いストーリーとしてまとめたつもりである。調査活動を進めていく中で、奄美大島から佐世保へ帰投する件については、証言者や文献によって、不時着地が徳之島であり、また帰投には潜水艦、民間船舶の乗り継ぎという内容もあったのは、すでに本文で紹介したとおりである。

ただし、私はこうした証言や証言に基づき記述内容を誤りであると指摘することなど毛頭考えない。大戦末期及び戦後直後の混沌とした時代にあつて当時の世情を知る先人の発言は当時においてある意味正しく、あるいは、やむを得ないものとする。次の記述は、森丘少尉が所属していた元山航空隊の生き残りの方が戦後主体となって編纂された図書からの抜粋である。

「しかし、何分にも50年の歳月である。詳しい資料はなく照合しようもないのと、頼りの個人の記憶も不確かさは被うべくもない。同じ事柄についても、日時や内容、関係する人物など百人百様の記憶としかいいようのない情況。しかも50年の長きにわたり、独り胸中に温めていた記憶だけに（老いて益々頑固に...とはいわないが...）容易に変更を許さぬほどの“確信”に化している。議論すれば自分が正しいと一歩も譲らぬようなことが縷々である。考え様によっては、個人の確信こそが、その人にとっての真実ともいえるので、編集方針としては少々の食い違いがあってもこだわらないということにした。その代わり原稿は執筆者を記していくということにした。」（注36）

今回、私はこうした証言内容の実態と取り扱いに十分配慮しつつも、あくまでもご遺族に80年が経過した今日、これまでなかなか見えづらい部分があった個所をわずかでも可視化して、ある程度結論づけることで、森丘少尉をよりいっそう身近に感じていただけたらと、その事を念じた調査研究でもあったことをご理解をいただきたい。

このたびは、ご親族等の胸の内に残る特攻隊員であった森丘哲四郎少尉の記憶を何よりも大切に考え、なおかつ特攻 80 年の節目に新味のある調査研究ができないものかと試行錯誤した上での本稿のとりまとめとなった。本年 4 月に名和まどか様に鹿屋市内でお会いして黒糖焼酎を一緒に嗜みながらのインタビューは貴重な機会であった。あの日、まどか様から、母上であり森丘少尉の実妹の名和まさ彖様が同少尉の慰霊のための各地を巡られたこと等を拝聴したことで、この調査研究の本格的活動が始まったのである。この結果をまどか様にお知らせし、名和まさ彖様の墓前にて報告していただくことが待ち遠しい。



と同時に、現代に生きる我々世代が果たすべき責務のひとつに、特攻隊顕彰の記録を後世に末永く継承することがある。本文中で紹介した森丘少尉のご遺族が発行されている『神風特別攻撃隊 森丘少尉』の「あとがき」の最後の文章には、「あなたの生涯は短かったが、この本を読む多くの人によって永く生きることを喜びます」（注 37）と結ばれている。

この本自体は、部数が限られ所蔵先もいずれ定かではなくなるだろう。今後はデジタル化によるデータベース化を図るとともに、生成 AI の活用によって国の存亡に身命を賭した森丘哲四郎少尉の短き人生を、デジタル空間において、いつでもよみがえらせ、永きにわたり語り続けられることを大いに期待したい。

「追記」

本文「2（4）不時着の際の森丘少尉の判断と手順に関する推察」の項を記述するにあたって、航空自衛隊の相澤直樹 1 等空佐（当時、防府北基地第 12 飛行教育団 航空学生教育群司令）に協力を得たことは本文内において紹介したとおりである。ここには、相澤 1 空佐が森丘少尉に成り代わり、七生隊の一員に指名された以降、不時着するまでの間の心理描写全文を掲載する。なお、相澤 1 空佐は、私が提供した関連資料のほか、ネット情報、並びに坂井三郎氏の手記や神立尚紀著「決定版 零戦 最後の証言」等を参照した上で、操縦及び緊急事態対処についての自己の経験に基づき次を記述している。

『特攻任務の搭乗割に自分の名前を見たときは「遂にこの時が来たか」と冷静に受けとめた。正攻法の爆撃や雷撃では戦果を得難くなり、特攻が開始され、そこでは一定の戦果が得られている。

鹿屋からは 3 月 11 日に梓特別攻撃隊の銀河が長駆ウルシー泊地まで進出し、空母ラン

ドルフ大破の戦果を得た。3月18日からの九州沖航空戦においても、撃沈空母5、戦艦2、巡洋艦3、不詳艦1の戦果を得たようだ。

4月1日、連合軍の沖縄上陸をもって陸海軍全機の特攻化が示された。4月6日発動の菊水一号作戦に特攻機搭乗員として参加することになった。編入した第七二一海軍航空隊「神雷部隊」の岡村基春司令からは「我が部隊では投下器に爆弾は固縛しない。突入前に爆弾を離し、貫通によって効果を大きくする。敵艦直前で離せ。遠くでも離せ。敵戦闘機に捕まったら爆弾を捨てて空戦をし。死ぬことが目的ではない。戦果を上げるために何回でも行ってもらう」と指導されている。任務に集中し、戦果を得ることが自分の務めだ。

第一七生隊隊長、宮武大尉から各区隊に命令が下達され、いよいよ出撃だ。我々の戦果の積み重ねのみが、敵の九州上陸を、本州侵攻を断念させることができる。今生に未練はあるが、人生の意味とは長短ではなく、どう生きたかだ。

整備員から搭乗機を引き継ぐ。ここから先は、自分の出番だ。機体は、発動機は、万全だろうか。任務さえ完遂できるのなら、多少の不具合は克服せねばならぬ。見送り、見送られる双方が平常心を装うのは、任務を前に交わす目礼時の礼儀である。離陸も平常心だったが、最後の離陸、最後の風景と心に留めた。しかし、離陸後まもなく、僚機の岡部及び鈴木両少尉は発動機不調により帰投した。

その後は、対空警戒を厳としつつも、暫し巡航速度で指揮官機との編隊を組む。敵と交わるまでの穏やかなるひととき、操縦桿を握る11区隊指揮官・小林哲夫少尉の心情は、我に同じか。離陸後1時間になろうとする頃、発動機が不調を訴え始めた。

ここまで順調だったことを考えると、燃料系統の不具合か。発動機関連計器の値は正常範囲ながら、シリンダー温度が低めを指している。カウルフラップを閉として対処しつつ、燃料コックの位置、自動混合気調整装置のレバーの位置を確認する。操作を誤ったわけではなさそうだ。しかし速度が保てず、高度も維持できない。編隊が乱れる。この機体では任務が遂行できない。申し訳ない気持ちを押し殺して不時着を決意し、手信号で指揮官・小林少尉の了解を得て編隊を離脱する。

海上の不時着は危険が多い。着水に失敗すれば負傷し、溺れる可能性が高まる。漂流して救助を待つ間に、フカに襲われた事例も聞く。右下は奄美大島か。数百米長の砂浜があれば、不時着に望ましい。奄美大島南部の深い入り江の上空を高度千米で通過していると、名も知らぬ湾の奥に広がる砂浜を認めた。切り立った山の南斜面の裾に広がる砂浜は、島の東側から海上を進入する経路の延長にある。山地との水平距離も問題なさそうだ。左降下姿勢で四分の三回転すれば進入できる。

砂地に主脚がとられれば機体は転覆する。脚は下げずフラップは通常どおり使用し、座席を下げて操縦席に閉じ込められないよう風防は開けておこう。しまった、二十五番（250キ）爆弾を抱えていた。このままでは不時着できない。左降下旋回から右バンクを切り返し、下方に船

がないことを確認した。

爆弾を投棄したら着水時に爆発するかも知れず、この高度では機体に破片に当たる可能性がある。針路東でいったん旋回を止め、無理を承知でスロットルレバーを開き上昇姿勢をとる。その刹那、敵艦を屠るはずだった爆弾を放り投げるように投下器から分離し、すかさず左急旋回で離脱する。岡村司令の爆弾を固縛しない方針に救われた我が身、次は不時着を成功させ必ずや再出撃して見せる。

西日に向かって着陸態勢を整える。砂浜に岩場は隠れていないだろうか。人はいないだろうか。横転しないだろうか。不安は尽きないが、やれるだけのことはやった。あとは運に身を任せよう。機体の接地を感じるやいなや、思いのほか強い衝撃で照準器に額を打ちつけた。肩バンドをきつく締めることを忘れていた。ただし額からの出血を除けば、けがはない。プロペラは無残に折れ曲がっているが、火の手が上がることもなく、初めてにしては上出来の不時着だろう。

零戦の不意な出現に、島民が駆け寄ってくるのが見える。先頭を走ってくるのは小学生たちだろうか。彼らを敵から守るために、戦果を挙げんと戦友は攻撃途上にある。必ずや我も続く。』

「参考資料一覧」

注1：『海軍特別攻撃隊第5七生隊 森丘哲四郎 手記』（公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 平成27年）

注2：前掲注1 xiv 頁

注3：『海軍特別攻撃隊戦闘記録 - 航空隊編 - 』（アテネ書房編集部 2001年）
237 頁

注4：前掲注3 257 頁

注5：前掲注3 258 及び 259 頁

注6：『元山海軍航空隊 特別攻撃隊「七生隊」の編成と出撃の状況』（海軍第十四期遺族会 茂木尚）3 頁

注7：前掲注3 256 頁

注8：前掲注3 266 頁

注9：前掲注3 272 頁

注10：前掲注3 258 頁「其ノ他」の欄内

注11：『若き特攻隊員と太平洋戦争』（森岡清美 2011年）153 頁

注12：前掲注3 273 頁

注13：前掲注1 v 頁

注14：『奄美郷土研究会報 第28号』（奄美郷土研究会名瀬 昭和63年）3

0 頁

- 注15：『昭和20年4月1日～昭和20年4月30日 大島防備隊戦時日誌』
- 注16：前掲注15 「3. 令達報告等 電報」の4月6日の記録」1729頁
- 注17：「再びは還らざる出撃をなす」（篠崎哲也 1995年『丸』6月号）245頁
- 注18：『わが町の戦中戦後を語る（思い出の体験記録集）』（瀬戸内町中央公民館 1989年）13頁
- 注19：前掲注1 v 頁
- 注20：前掲注18 「海軍航空隊古仁屋基地での回想」荒川一郎 142頁
- 注21：前掲注18 「戦争の思い出」三谷武円 74頁
- 注22：『“あゝ痛恨”戦争体験の記録』（社団法人 鹿児島県医師会 1978年）404頁
- 注23：前掲注22 「私の沖縄戦」神園望 404～405頁
- 注24：前掲注20 143頁
- 注25：『とんぼ』（乙飛予科練十期生生存者の記録 十期雄飛会 昭和58年）笹岡義重 194頁
- 注26：『太平洋戦争に死す』（蝦名賢造 西田書店 1983年）177頁
- 注27：前掲注17 245頁
- 注28：『神風特別攻撃隊七生隊 森丘少尉』（森丘正唯 伊東秀雄 昭和42年）202～204頁
- 注29：前掲注22 405頁
- 注30：前掲注22 406頁
- 注31：『元空戦の集い』（元山海軍航空隊史編集委員会 平成6年）83頁
- 注32：前掲注1 v 頁
- 注33：前掲注28 203頁
- 注34：前掲注22 13頁
- 注35：前掲注3 13頁
- 注36：前掲注31 186頁
- 注37：前掲注28 249頁